

会誌9号に「終戦前後のこと」を載せていただきましたので、重複する部分もありますが、昭和16年生まれの私の年代が、戦争の怖ろしさを知る最後の世代と思ひ、書かせて頂きます。

生まれは東京田端、関西人で昔の阪神急行電鉄（阪急電鉄）に勤めていた父が、東京に出たのは恐らく軍務のためと思います。

田端時代の記憶は一切無く、一家で昭和19年末頃、東京から御影に引っ越した時から記憶が始まります。

御影に行つてすぐに空襲に備えた灯火管制・防空演習・防空壕掘りが始まりました。防空ずきんを作つて貰い喜んでかぶりましたが、今から思えば、火の粉を避ける以外は役に立たないものでした。

父に何度目かの召集令状が来たのもその頃で、隣組の方々と共に旗や「祝出征」と書いた幡を立てて見送つたのをはつきり覚えています。

父の場合は40歳を越していたこともあり、木村先輩のように南方へ送られることもなく、内地勤務だったそうです。

御影の家と近所が丸焼けになったのは、昭和20年

6月、母がすすと泥まみれで裸足で芦屋の祖母の家にたどり着きました。私はその前日、祖母が連れに来て芦屋に遊びに行つていて、迫る猛火や焼死体を見ることもなく幸いでした。生まれは田端一帯も東京大空襲で全部焼けたそう、もしそのまま住んでいたら親戚もない土地で逃げ場もなく、死んでいたのでは、など思うとぞつとします。

芦屋でもその後、頻繁に空襲警報が発令され、皆で逃げ回りました。幸い私たちの近所には焼夷弾は落ちませんでしたが、少し離れた阪神国道筋沿いが猛火に包まれているのをはつきり見ました。

20年の9月頃、何も知らずに戦争ごっこをしていた私に「戦争は終わったからそんな遊びをしてはあかん」と帰つてきた父に言われて初めて敗戦を知りました。

叔父に連れられて三宮や梅田に出た時、一面が焼け野原で小さなバラックが沢山建つて、闇市が開かれておりました。

千里山に引っ越してきたのは21年4月頃、大きな噴水があり、焼け跡も、バラックも闇市もない風景に平和を実感、戦争は二度と起こしてはいけないと強く思いました。

「真実のわだつみ」で初めて紹介された木村先輩の

憤り「日本の軍人、ことに陸軍の軍人は、やはり国を滅ぼしたやつであり、我欲そのもの他は何物でもでもないかかった（一部略）」は戦争中、多くの人がそう思いつつ、決して口外できなかったことです。「聖戦遂行」の名の下厳重な言論統制が敷かれ、反・厭世的な言動がもれば特高に引っ張られ、拷問の末、殺されることもあった時代です。

東京裁判の結果、東条英機以下7名が絞首刑となりました。東京裁判は戦勝国による一方的な裁判であるから無効との説をよく聞きます（日本は1951年9月調印のサンフランシスコ講和条約で東京裁判を含む各国の戦犯法廷の結果を受け入れている）、日本国憲法も連合国の押し付けであるから改正（改悪？）すべしとの議論が最近高まりつつあります。

講和後刑死した7名は公務死とされ、遺族は軍人恩給を貰ひ、靖国神社に合祀されました。敗戦後日本として、「中国大陸に攻め込み、世界を相手の太平洋戦争に突入、結果的に広島、長崎に原爆を落とされ、全国を焦土化し、軍民300万人の生命が失われた事実」、及び「降伏に反対し本土決戦、「億玉砕を叫んだ軍部」に対する責任の追及は一切行われなかった筈です。木村先輩の遺書でも「満州事変以降の軍部の行動を許してきた、全日本国民に遠い責任がある・・・」

とあります。今となつては「過去を反省し、憲法を守り、侵略戦争は絶対にしない」ことを再確認するくらいしか手段はないのでしょうか。

7名が合祀されて以来、靖国神社には参拝しないと固く決められた昭和天皇のご決断は非常に重いものと考えねばなりません。

現在近隣国との間に微妙な問題が起っております。

「過去の反省と不戦の誓い」を新たにするのは勿論ですが、現行憲法の枠内でもいわゆる平和運動家が反対する「抑止力」としての最新兵器の保持・開発や他国との「安保条約」継続は必要だと思ひます。

家に鍵もかけず、例え一生使う機会が無いとしても消火器も置かず、エアバッグのない車に乗り、保険にも入らない生活は考えられるでしょうか。 おわり